

立正大学研究推進・地域連携センター支援費第1種 採択課題

河口慧海による『法華経』翻訳の再評価

庄司 史生*1, 松山 典正*2, 小此木 敏明*3

*1仏教学部助教, *2文学部助教, *3文学部非常勤講師

概要と目的

仏典は、【1】宗教的(この場合は仏教的)テキストであると同時に【2】文学的テキストでもある。仏典について、哲学、宗教学、仏教学、歴史学、社会学、文学といった各専門領域の視点に基づき、その世界史上における意義について学際的に検証する必要性がある。このような問題意識を前提とし、本研究では各専門領域における分析と、それら諸成果の総合を試みる。具体的には、ある同一のテキストについて、【1】仏教学と【2】日本文学の視点から読解を行う。

本研究では、河口慧海(1866-1945)によって翻訳された『法華経』を取り上げる。従来、彼は仏典等の将来者としては評価されているものの、仏教学者(翻訳と研究)としての評価、或いはその著作や翻訳の背景となる近代の日本の教養人としての評価を与えられる機会を得るには至っていない。そこで本研究では、彼が翻訳した『法華経』について、【1】原典と翻訳されたテキストとの対比による訳語・訳文に対する再考、【2-A】翻訳されたテキストを「日本語のテキスト」として読解、【2-B】訳語・訳文を取捨選択する際にその基準となった翻訳者の文学的背景(河口慧海の文学観)を明らかにする。本研究では【1】仏教学と【2】文学の立場から[図1]の通りにアプローチすることで、世界史上における河口慧海による『法華経』翻訳の意義を多角的に明示することを目的とする。

研究の特色

サンスクリット語原典からチベット語へと翻訳され、さらにそれが日本語へと翻訳されたテキストについて、[図1]の通り、3種の立場による分析と総合を試みる点に本研究の特色がある。従来、このような3種の方法を用いた研究は十分なされておらず、先行する研究はほとんどないといえる。

本研究では近年立正大学品川図書館より発見された彼の旧蔵書の中に見いだされたサンスクリット本や線装本の『法華経』と、そこにみられる書入れをも研究資料として認めた上で使用する点も独創的である。立正大学が所蔵する河口慧海旧蔵書は、彼が没するまで手元においていた資料という点に特色があることから、それらは彼が有していた教養や、また彼の晩年の思想的背景を探る上で活用されるべき資料であるといえよう。このように、彼の旧蔵書の蔵書構成や書入れを考慮した上で翻訳テキストを読解することにより、翻訳者とテキストに総合的な評価を与えることが可能となる点に本研究の意義がある。

また、本研究では基本的に、明治期以降(いわゆる近代)の資料を直接的に扱うことになる。近代日本を研究対象とした研究の推進は、現存する資料が失われる前に、今後なされるべき課題である。

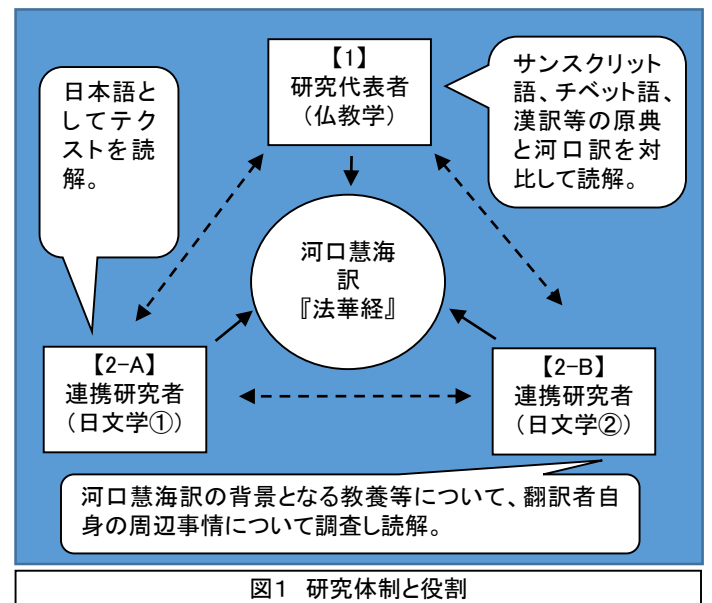


図1 研究体制と役割

計画と方法

本研究は、河口慧海が翻訳した『法華経』を主たる研究対象とし、[図1]に基づき、【1】研究代表者(仏教学)、【2-A】連携研究者(日文学①)、【2-B】連携研究者(日文学②)の3名で行う。本研究を遂行する3名の研究者の役割は次のとおりである。

【1】研究代表者(仏教学): 仏教学の立場から、河口慧海が翻訳の際に使用した『法華経』原典(サンスクリット文献、チベット文献、漢訳文献)の概要をまとめる。またサンスクリット、チベット、漢訳と河口慧海が参照したと推定される各言語からの翻訳書との対照テキストを作成する。このようなノートを作成した上で、原典と河口訳とを対比し、その翻訳の際の原典との相違点など、特徴的な箇所をピックアップする。

【2-A】連携研究者(日文学①): 日文学の立場から、河口慧海によって翻訳された『法華経』を、「日本語としてのテキスト」として読解する。そして、他に存在する「日本語に翻訳された『法華経』」とを比較し、翻訳上における影響関係について調査する。

【2-B】連携研究者(日文学②): 日文学の立場に基づき、翻訳者たる河口慧海という人物像(特に文学観)について、彼の他の著作や旧蔵書、また旧蔵書に見られる書入れを調査する。つまり、河口慧海が『法華経』を翻訳するに至る周辺事情について調査の上、「日本語に翻訳された『法華経』」の背景を明らかにする。

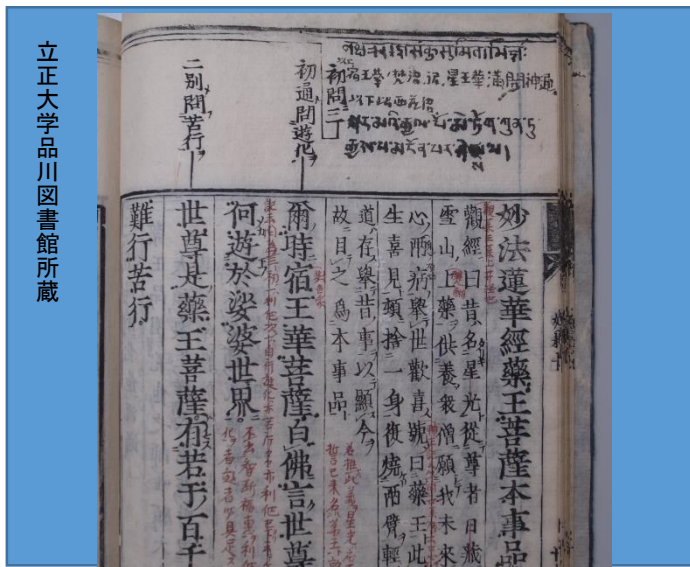


図2 『科註妙法蓮華経』における河口慧海による書入れ(右上)

成果と展望

本年度の活動において得られた成果の一つとして、河口慧海が所有していた『科註妙法蓮華経』中に、彼の自筆の書入れ(サンスクリット語、チベット語を含む)があり([図2]参照)、またそれと対応するように、彼が所有していた梵本『法華経』(いわゆるケルン・南條本)の該当箇所にも書入れが確認されたことをあげることができる。このことは、彼が法華経を読む際に、訓点の付された上記の『科註妙法蓮華経』、そしてケルン・南條本(共に立正大学品川図書館所蔵)を参照していたこと傍証するものといえよう。今後は、彼の旧蔵書を参照しつつ、各分担において作業を進め、『法華経』の「方便品」のみならず、経典全体にわたって総合的に読解を行い、河口慧海による『法華経』翻訳の意義についてさらなる考察を行い、その成果の公表を目指す。